

いちご 炭そ病について



STOP

ほ場の水管理の見直しを！

令和3年9月16日

埼玉県加須農林振興センター



診断のポイント

● 高温多湿条件で発病しやすく、強い雨や夕立の後に急激に発生する。

● 主にランナーや葉柄に局部的に発生し、少し陥没した黒色の病斑が見られる。葉柄に発生し進展すると折損する。

● 葉に発生した場合は円形の薄黒い病斑が見られる。

! 病斑が見えずにクラウンに発生し、株が枯死する場合がありますため注意。

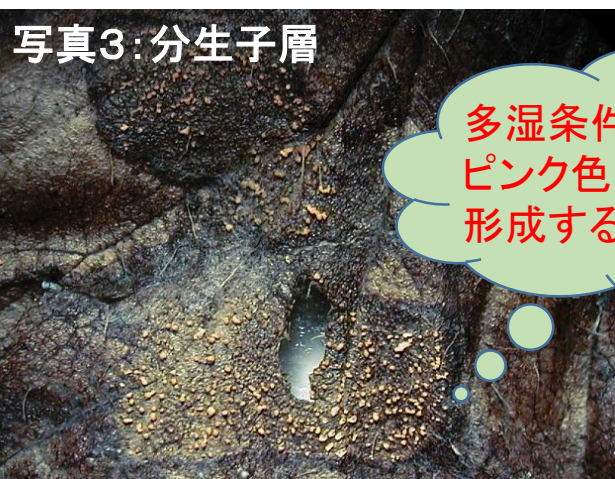


写真1: 発病し、葉柄が折損している



写真2: 発病した葉柄及び葉

写真3: 分生子層



多湿条件下ではサーモンピンク色の分生子層を形成する。

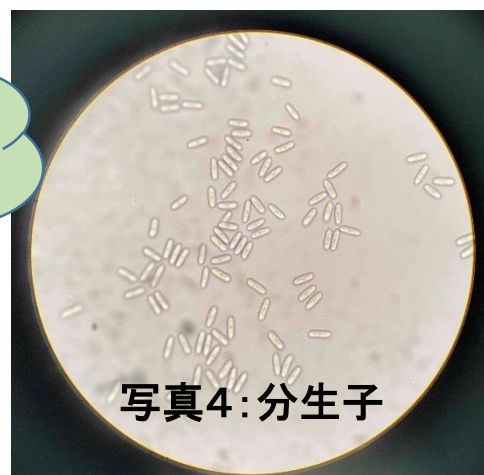


写真4: 分生子

← Next 対策のポイント

※写真1～3は埼玉の農作物病害虫写真集より抜粋



対策のポイント



チェック✓

① ほ場に持ち込まない

いちご苗が潜在的に炭そ病に感染している場合、外見から判別することは不可能である。買い苗ではウイルスフリー苗を積極的に導入し、自家増殖苗では前年に発病していない健全な株を親株として使用する。また、耕起の際にはトラクタなどの農機具は洗浄してから使用する。

チェック✓

② 水管理の徹底



灌水方法を改善する

炭そ病菌は残さ組織とともに土壤中越冬し、感染源となる。その後雨水の流入や灌水による泥はねにより株に炭そ病菌が付着し、第一次伝染につながってしまう。そのため、灌水は頭上灌水ではなく株元灌水(もしくは点滴灌水が望ましい)を行い、泥はねを防止するとともに、ほ場内は水が溜まらないように排水対策を行う。

チェック✓

③ 親株床・仮植床管理



直接地床に苗を置かない

親株床では、空中採苗であれば床に防草シートを敷き詰め、地床であれば雨よけ栽培を行い、排水対策を行う。仮植床では、なるべく地床から苗を離すことが望ましいため、ベンチを設けるか、コンテナや育苗トレーを重ね、高さを確保する。仮植床においても防草シートを敷き詰め、泥はねを防止する。**※親株で発病した場合は小苗に伝染する(第二次伝染)ため、親株ごと引き抜き、ほ場外で処理する(周辺の株も抜き取る)。**

チェック✓

④ 栽培環境を整える



温湿管理が重要



炭そ病菌が高温多湿を好むことから、高温対策としての遮光と換気を行い、密植・過湿を避け、植物体の過度にぬれた状態を回避する。また、過度な窒素施用は炭そ病の発生を助長するため、土壌診断を行い、適正な施肥を行う。

チェック✓

⑤ 土壌消毒・薬剤散布



予防に努める

次作に向けて、ほ場では太陽熱消毒を行い、可能であれば土壌還元消毒を行う。薬剤散布は耐性菌を出さないように農薬ローテーションを意識する。